成句“桂林山水甲天下”の出自と典拠について
―― 王正功の詩と范成大・柳宗元の評論 ――

戸　崎　哲　彦

はじめに

中国・桂林の山水は古来有名である。清代の石刻学者葉昌熾はその名著『語石』（光緒二七年1901）巻2「廣西」の条の冒頭に「“桂林山水甲天下”、唐宋士大夫度嶺南來、題名賦詩、摩崖殆遍」という。桂林の山水は唐・宋の間に官僚・文人・墨客が訪れてその美を称えて以来、今日では中国内はもとより、世界的にも有名あり、それはしばしば「桂林山水甲天下」という成句で語られる。1998年夏、先の米国大統領クリントンは訪中して上海・北京・西安・桂林の四つの都市を訪れたが、中国の新聞によれば(1)、桂林を訪問したクリントンは市内の七星公園で講演し、その中で「中国没有任何一個地方比桂林更美麗」と桂林の美を称賛したという。この一文はクリントンの語った英語を現代中国語に翻訳したものであるが、中国語「桂林山水甲天下」の散文訳に極めて近い。クリントンは名句「桂林山水甲天下」を英語訳で知っていたのではなかろうか。

では、世界的に知られるようになった「桂林山水甲天下」という成句はいつ、どのようにして生まれたのであろうか。明・万暦二十二年（1594）に桂林を訪れた兪安期「桂林巖洞雑詠」の「序」に「昔人謂“桂林山水甲天下”、非以巖洞勝乎」という。これによれば「桂林山水甲天下」という七字句はすでに明代には人口に膾炙していたらしいが、「昔人」とは誰なのか。じつは2001年に桂林で“宋人王正功‘桂林山水甲天下’研討会”が開催され、今日では、桂林市内にある独秀峰に刻石されている南宋・王正功の詩句に「桂林山水甲天下」とあるのによってこれを最初とするのが定説となっている。しかしそれ以外にも多くの説があり、譚発勝・苗潔「王正功生平拾議」（『桂林名城研究』1991年総第五期）は従来の説を紹介して「宋人李曾伯」・「明人董傳策」・「清末金武祥」を挙げ、「甚だしきに至っては唐以前の名作名言であると証明する者もいる」といい、味水「宋代広西科挙史上兩椿軼事一兼及“桂林山水甲天下”之出処」（『広西文史』2002-1）も「南宋李曾伯」・「清代光緒年間……金武祥」に求める説を紹介する。

(1) 『桂林日報』1998年7月3日「美国総統克林頓訪問桂林」。

さらに王正功以前に求めて南宋・范成大や唐・柳宗元を挙げる者もいる[2]。今、筆者の知る所では少なくとも次の諸説がある。

1）清・金武祥：「遍游桂林山岩」詩に「桂林山水甲天下、絶妙漓江秋泛圖」。

2）明・董伝策：「粤西山水歌」に「粤西山水甲天下、蜀中險絶此其亞」。

3）南宋・李曽伯：「重修湘南樓記」に「桂林山川甲天下」。

4）南宋・王正功：詩句「桂林山水甲天下」。

5）南宋・范成大：『桂海虞衡志』に「余嘗評桂山之奇、宜爲天下第一」。

6）唐・柳宗元：「撰訾家洲亭記啓」に「今是亭之勝甲于天下」。

金武祥の詩句は明・兪安期より後であるから明らかに誤りである。董伝策は嘉靖二十九年（1550）の進士、南寧での作「青秀山記」に「嘉靖甲子（四十三年）春正月上元日記」というから「粤西山水歌」はその間の作。兪安期より二・三十年早いが、「桂林」を「粤西」に作っている。ただし董伝策「游桂林諸巖洞記」の末に「因復得『粤西山水歌』一篇云」というように、「粤西」とは「桂林」を指す。李曽伯の句は極めて近いが、「山川」に作る。そこで時代的に見れば確かに王正功が最も早いといえるが、これにはいくつかの問題がある。じつは明清では王正功の独創と認められていなかった。それはなぜなのか。また、范成大・柳宗元を挙げるのは「桂林山水甲天下」の出自というよりもそれと類似の評価と表現という点から典拠を求めたものであり、そうならば、従来の説で挙げられていないものは多い。本稿では成句「桂林山水甲天下」がいかに生まれたのか、その出自・典拠について考察を加える。

Ⅰ　王正功の詩とその発見

嘉泰元年（1201）、広西路提点刑獄・権府事であった王正功（1133～1203）は桂林で科挙受験者を中央に送る壮行の宴を設けて詩を作った。その第二首の冒頭に「桂林山水甲天下」という句が見える。この詩は門下生によって独秀峰の東南壁に刻され（縦17＋94＝111cm、横66cm；字径、篆額9cm、詩5cm）、今日に至ってもほぼ完全な形で残っている。

王正功詩の校勘

今日に伝わる王正功の詩は、中国の国家的プロジェクト“全国高等院校古籍

---

[2] 桂林市人民政府文化研究中心・桂林市海外旅游総公司『桂林旅游大典』（漓江出版社1993年）「范成大」（p611）、「訾家洲亭記」（p474）、黄家城『桂林旅游史略』（漓江出版社1998年）「桂林旅游声名的鵲起」（p38）。

整理研究工作委員会重点項目”として編集出版された『全宋詩』の第四五冊（北京大学古文献研究処編、傅璇琮等主編、北京大学出版社1998年）巻2442（p28269）に収められているが、その数はわずか三首のみである。三首とも桂林での作であってその石刻はいずれも現存している。逆に言えば王正功の詩は桂林に現存しているものしか知られておらず、その石刻は極めて貴重な史料である。ただし『全宋詩』の収録と整理には多くの誤りがある。

（1）「桂林山水甲天下」の詩は、『全宋詩』は注に「桂林石刻博物館拓本」に拠って収録したとして詩題を「嘉泰改元……行宴享之禮作是詩勸爲之駕」に作るが[3]、独秀峰の読書岩に現存する石刻には「……行宴享之禮。提點刑獄權府事四明王正功作是詩、勸爲之駕」とある。『全宋詩』の編者・整理者が「提點刑獄權府事四明王正功」の十二字を缺いているのはこの部分が作者本人の詩題として適当でないと考えたからであろうか。しかし「作是詩」があるのはそれに合わない。また、これは詩題というよりも詩序と考えるべきであろう。

桂林独秀峰刻“王正功詩”

（2）『全宋詩』は第二首第五句を「九關虎豹看勁敵」に作るが、「勁」字は原石では明らかに「勍」字に読める。また平仄律から見ても「勁」（仄）は適当ではない。この点からみても「勍」（平）が正しい。

（3）『全宋詩』は言及していないが、詩の上には篆額がある。今日、篆額（縦18cm）の上部は不鮮明であるが、縦二字・横七字の計十四字から成り、それが「□府□略□刑□中□公□□□詩」であ

(3) 桂林石刻博物館は桂海碑林のことであり、桂海碑林編『桂林石墨菁華』（漓江出版社1993年）に「宋・王正功桂林大比宴享禮勸駕詩并序」（p78）として拓本の影印を収める。

ることは判読可能。写真「桂林独秀峰刻“王正功詩”」を参照。「略」の上は意味上「經」、「刑」の上は右下部分が残っており、それと前後の意味から考えて「提」。「公」と「詩」の間の字は、上半分は不鮮明であるが、下半分は「貝」であるから「賀」字に近い。そうならば「……賀」と「詩」の間の字は「之」であろう。桂海碑林編『桂林石墨菁華』（漓江出版社1993年）は「□府經略提刑大中丞公□□□詩」と判読しているが、何英徳氏「讀宋人王正功兩首詩所想到的」（2001年11月初稿）(4)は「使府經略提刑大中丞公宴賀之詩」とする。今、何氏の解読に従っておく。『全宋詩』にはこの他にも石刻に拠りながら誤字が多く、現存の石刻に拠るべきである(5)。

王正功詩の発見と亡佚時期：

この王正功詩には「桂林山水甲天下」とあり、石刻は読書岩の洞口外、人目につきやすい位置にあって（洞口の向かって右＝南東、高さ約2.5m～3m）、かつ比較的大きいもの（縦120cm×横65cm）である。しかしこの詩はどうもかなり早くから知られることがなかったらしい。譚発勝「王正功生平拾議」（1991年）によれば、「1983年に文物工作者の楊寅生・胡湘武が独秀峰で石刻の整理をしていて発見した」という。1974年から開始された石刻調査に基づいて抄録・対校・整理された桂林市文物官吏委員会編印『桂林石刻』（後記1981年）に収められていないのはそのためである。楊舲「釋“桂林山水甲天下”」（『桂林文博』1988年1期）は、それに「新近在独秀山讀書岩口發現」というから、発見に因って執筆された最初の論文であろう。また、味水「宋代廣西科挙史上兩椿軼事一兼及“桂林山水甲天下”之出處」（『広西文史』2002-1）によれば、王詩の石刻は「鍾乳石に覆われていた」という。今日でも上部から鍾乳が滲み出しているのが確認される。

王詩石刻が鍾乳石に覆われてしまったのはかなり早いのではなかろうか。桂林の石刻を録して最も完備している謝啓昆『粤西金石略』（嘉慶六年1801）や胡

---

(4) “宋人王正功‘桂林山水甲天下’研討会”に何英徳（桂林博物館副館長）が提出された論文であり、未刊。この他、何氏より多くの関係資料を提供いただいた。ここに記して感謝の意を表する。

(5) 『全宋詩』にはこの他にも脱字が多く、『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編・宋代分冊』に拠って収録・整理した詩題「嘉泰二年歳在壬戌正月八日攜家還里……」詩は、龍隠岩（七星公園内）に現存しており、「嘉泰」の行の前に「提刑王公留題乳洞」とあるから、詩題は「留題乳洞」あるいは「乳洞」と考えるべきであり、また「……正月八日」の下に「四明王正功」の五字があり、さらに詩末には刻石の由来が注記されている。

虔『臨桂縣志』（嘉慶六年）には、龍隠岩に刻されている王正功「乳洞」詩を録しているが[6]、独秀峰に刻されている王正功「宴賀之詩」を収めていない。張鳴鳳は桂林に住んで文物・歴史を調査し、その著『桂勝』（万暦十七年1589）には当時現存した石刻を収録しているが、王詩はこれにも見えない。早くは黄佐『廣西通志』（嘉靖四年1525）にも録されていない。兪安期が「昔人謂“桂林山水甲天下”」（万暦二十二年1594）というのもそのためであろう。どうも明・清人は王正功の詩の存在を知らなかったように思われる。また、王正功の文集も早くから佚していた。南宋・楼鑰「散請大夫致仕王君墓誌銘」（『攻媿集』100）に「有『荊灃集』行于時」というが、今日知られる王正功の詩は桂林に刻石された三首のみである。王正功については不明な点が多い[7]。したがって王正功「使府經略提刑大中丞公宴賀之詩」は明代あるいはそれ以前から知られることがなかったと思われる。

Ⅱ　明・清人の范成大説とその背景

このように、王正功の詩句に「桂林山水甲天下」とあったにも関わらず、その石刻はすでに宋・明の間から鍾乳石に覆われて知られなくなっていた。しかし「桂林山水甲天下」という句は明代には人口に膾炙しており、そこでその出自が他に求められるようになった。その中で最も有力であったのが范成大説である。

明清人の范成大説：

桂林出身の画家・朱樹徳による光緒十七年（1891年）の作「桂林八景題記」[8]に次のようにいう。

石湖（范成大の号）常評“桂林山水甲天下”、又非諸勝所能盡述也。

しかし范成大『桂海虞衡志』には「余嘗評桂山之奇、宜爲天下第一。……其怪

---

[6] 龍隠岩内に刻されて現存。明・黄佐『廣西通志』巻12には「乳洞在龍隠巖後」として「元・王思勤詩」を引くが、これは王正功の嘉泰二年作の詩であり、それに王思勤の跋があり、「先生……解組東歸、僚屬送別至興安、……思勤等歸相與謀而壽諸石、後十日刻之龍隠巖。門下士豫章王思勤……謹跋」というから、龍隠巖の後に乳洞があったのでなく、興安県の乳洞、今の乳洞岩での作である。

[7] 王正功は広南西路提点刑獄となり、「墓誌銘」によれば四品にまでなったにも関わらず、『宋史』に伝は立てられておらず、名さえ見えない。まるで歴史から抹殺されているかの如くである。

[8] 畳彩山に刻す。桂林市文物管理委員会編『桂林石刻』（1979年）に拓本影印（p61）を収める。

且多如此、誠當爲天下第一」とあり、「桂林山水甲天下」という表現は見えない。さらにその三百年前、万暦十七年（1589）桂林に在って張鳴鳳とも交遊のあった地理学者・王士性（1547-1598）[9]は『桂海志續』を著し、その序に次のようにいう[10]。

昔宋范成大帥粤、愛其土之山川、及移蜀猶不忘、憶而作『桂海虞衡志』、稱“其勝甲於天下”。

このように、明・清人は『桂海虞衡志』の言「天下第一」を「甲於天下」「甲天下」と理解していた、あるいは記憶していた。また、先に挙げた従来の説にいう明・董伝策には「粤西山水甲天下」という詩句があるが、同人の「游桂林諸巖洞記」の冒頭に「余閲宋范穆公成大『桂海虞衡志』、見其“評桂山之奇……當爲天下第一”。私竊意其爲過言、乃今來遊桂林、覩諸峰……其奇怪、奪目驚心、殆不可具状。昔人所以論列猶爲不及云」といい、その末に「因復得『粤西山水歌』一篇云」というから、「粤西山水歌」の冒頭に見える「粤西山水甲天下」も王正功の詩ではなく、范成大の言に依拠して作られた詩句である。

そこで明清人が「桂林山水甲天下」を范成大の言と考えるようになった原因として先ず次の点が挙げられる。

（1）「桂林山水甲天下」の見える王正功「使府經略提刑大中丞公宴賀之詩」（嘉泰元年1201）は明代あるいはそれ以前から知られなくなっていた。

（2）范成大『桂海虞衡志』に「余嘗評桂山之奇、宜爲天下第一」という類似の表現があった。

しかし原因はこれだけではない。この他にもいくつかの要因が考えられる。

范成大説の背景

そもそも王正功の詩（嘉泰元年1201）以後、それと類似の表現をした言辞は多い。例えば戴復古（1167～？）の「玉華洞」詩に「憶昨遊桂林、巖洞甲天下」、

---

[9] 張鳴鳳は王士性『入蜀稿』に「序」を書いており、それに「臨海王公恒叔南出廣右、分藩右江。以今歳夏盛暑將家歡言到官、間過張子、數海内名山、皆嘗至者。計所未至三之一也。張子故喜遊、積二十餘年杭策諸山、僅視公半、固已屈伏。明日奉公『入蜀稿』、則公去秋使蜀時行次所記。……萬暦己丑（十七年1589）秋八月朔始安張鳴鳳撰」といい、また王士性『五嶽遊草』巻七「桂海志續」に「隱山……。余以九月望約張羽王至。……呉武陵記隱山、刻意描畫、至稱石室・東巖水、……。今皆無之。武陵至今僅千年、何陵谷古今之異如此。因與羽王嘆息而別」と見える。「羽王」は張鳴鳳の字。

[10] 周振鶴編校『王士性地理書三種』（上海古籍出版社1993年）所収『五嶽遊草』巻七「滇粤遊上」に拠る。

宝佑六年（1258）作の李曽伯「重建湘南樓記」に「桂林山川甲天下、三百家年間無兵革之警」という。これら南宋人の表現には、それに先行するものとして王正功の詩句の影響が考えられないこともない。しかし王正功以前にも類似の表現は多く見られる。例えば張洵「蒙亭唱和」詩（靖康元年1126）の冒頭に「桂林山水冠衡湘、蒙亭正在山水傍」という。この「冠」は「甲」と同義である。「衡湘」は今の湖南省の衡山およびその麓を流れる湘江を指すが、ここでは湖南から広西にかけて一帯を指すと考えてよかろう。ちなみに崇寧元年（1102）作の李彦弼「湘南樓記」に「昔之賦客詩人、咸指桂林爲湘水之南、嘗試以湘南命焉」といい、唐・韓愈が柳宗元のために書いた「柳子厚墓誌銘」にいう「衡湘以南、爲進士者皆子厚爲師」は有名である。また、張孝祥「千山觀記」（乾道二年1166）には「桂林山水之勝甲東南。據山水之會盡得其勝、無如西峯」、紹定間（1228～1233）頃に容州法曹となった羅大経の「游南中巖洞記」に「桂林石山怪偉、東南所無」という。この「東南」とは南宋の版図を指す。また、常演「桂林巖記」（淳熙丁酉1177）には「桂林巖寳甲西南山水之勝」、張釜が象鼻山の水月洞に刻した題名（紹熙五年1194）にも「桂林山水之勝冠絶西南」という。これら「桂林山水（之勝）甲/冠/冠絶……」という対象と比較表現は王正功と同じである。ただ比較の範囲が異なっており、「衡湘」「湘南」「東南」「西南」というように、未だ“天下”には至っていない。これは大きな相異点である。王正功の前にあって天下にまで推し広げているのが范成大である。乾道九年（1173）、范成大は静江知府兼広南西路経略安撫使として桂林に赴任し、その著『桂海虞衡志』（淳熙二年1175）「志巖洞」に「余嘗評桂山之奇、宜爲天下第一。……誠當爲天下第一」という高い評価を与えた。「甲」とは「第一」の意味であり、「爲天下第一」という散文を詩的な表現にすれば「甲天下」ということになる。そこで「桂林山水甲天下」の起源として范成大が考えられたわけである。

しかし天下第一の評価を与えたのは范成大が最初ではない。たとえば孫覿（1081-1169）は范成大よりも約四十年も早い紹興二年（1132）、象州に流謫された時、桂林を経由して「桂林十詠」を作っており、その自序に次のようにいう。

> 桂林山水奇麗、妙絶天下、柳子厚記訾家洲亭、粗見其略。余以六月六日度桂嶺、更僕詣象、……名之曰“桂林十詠”。

この「桂林山水奇麗妙絶天下」を詩句にすれば「桂林山水甲天下」となろう。孫覿の表現は范成大の「桂山之奇、宜爲天下第一」よりも「桂林山水甲天下」に近いが、従来の説では孫覿を挙げるものはいないようである。また、孫覿よ

りもさらに三年早い建炎三年（1129）に海南島の瓊州に流謫された李綱（1083－1140）の詩題に次のようにいう。

道陽朔、山水尤奇絶、舊傳爲天下第一、非虚語也。賦二絶句。

陽朔は桂林に属する県である。「絶妙天下」も「天下第一」と同じく「甲天下」と同義であり、表現そのものに拘るならば、李綱は范成大よりも約半世紀前にあって「天下第一」といっているわけである。また、范成大が「桂山之奇」というのに対して「山水尤奇絶」としている。したがって「桂林山水甲天下」の起源は范成大ではなく、李綱に求めるべきである。これも従来の説には見ない。ただし「舊傳」といっているように、李綱自身の評価ではなく、すでに当時そのような評価が一般的に行われていた。この点については後に詳しく述べるが、桂林の山水にあって陽朔を第一とする評価は恐らく沈彬（864？-961）や張師正（1016-？）らの影響が大きいであろう。張師正『倦遊雜録』（元豊元年1078以前の作[11]）「陽朔石峯」に次のようにいう。

桂州左右、山皆平地拔起數百丈、竹木蓊鬱、石如黛染、陽朔尤奇（一作佳）、四面峯巒皆駢立、故沈水部彬嘗題詩曰：“陶潛彭澤五株柳、潘岳河陽一縣花。兩處爭如陽朔好、碧蓮峯裏住人家”。

張師正は仁宗の嘉祐四年（1059）に知宜州となっているから、陽朔を経て赴任した時に沈彬「陽朔碧蓮峯」詩を通してその山水美を「尤も奇なり」と認識したものと思われる。『倦遊雜録』のこの条は、後に阮閲『詩話總龜』（宣和五年1123）15「留題門」や胡仔『苕溪漁隱叢話』（紹興十八年1148自序）前集55などにも引かれているから当時有名であった[12]。

このように、桂林の山水を天下第一とするような評価は明らかに范成大以前から多くの人に説かれていたのである。しかし明・清では范成大に帰する者が多い。それにはいくつが原因が考えられる。

---

(11) 李裕民輯校『宋元筆記叢書・倦遊雜録』（上海古籍出版社1993年）「前言」に拠る。

(12) 阮閲『詩話總龜』には『詩史』として引き、ほぼ同文である。『詩史』（佚）は「集一百家詩話總目」に「蔡寛夫『詩史』」と見えるそれであり、蔡寛夫（名は居厚）は紹聖元年（1094）の進士であるから、『詩史』の作は『倦遊雜録』よりも三十年は後のことである。したがって『詩史』の同文は『倦遊雜録』からの引用か、あるいは『詩話總龜』にいう「詩史」は「倦遊雜録」の誤りではなかろうか。「集一百家詩話總目」に「倦遊録」と見え、実際に多く引かれており、また『苕溪漁隱叢話』も『倦遊録』からの引用とする。いずれにしても『詩史』よりも『倦遊雜録』の記載の方が早いわけであり、傅璇琮『唐才子傳校箋』（中華書局1990年）10「沈彬」（p449）は『詩話總龜』に引く『詩史』に拠っているが、『倦遊雜録』に拠るべきである。

1）まず容易に挙げられるのが范成大の知名度の高さである。范成大は南宋のみならず、明・清においても宋代を代表する官僚・文人として知られた。文学史では、范成大は陸游・楊万里・尤袤とともに“南宋四大家”の一人に数えられる。ちなみに陸游はかつて范成大に招かれた幕僚であった。李綱・孫覿は政治家としても有名で作品も多く残っているが、李綱・孫覿・王正功らの文名はその比ではなかった。

2）次に、著書等の影響が挙げられる。范成大の著作は、南宋四大家の名の通り、極めて多い。詩文集は『石湖集』百三十六巻にも上り、その他に『呉郡志』・『桂海虞衡志』・『呉船録』・『攬轡録』・『驂鸞録』・『菊譜』・『梅譜』等々、多くの著書がある。桂林滞在中にも数多くの詩文を作っており、刻石されて今日に伝えられているものも少なくない。『桂海虞衡志』は桂林及びその周辺の視察記録ともいうべきものであり、『驂鸞録』は桂林に赴任した時の旅行日記ともいうべきものである。これらの著書は後に歴朝の方志に引かれ、また桂林を訪れた官僚・文人等に多く読まれている。中でも『桂海虞衡志』は、今日では完本は伝わっていないが、かつて桂林を知るための必読の案内書であったともいえる。早くは広南西路桂林通判として赴任した周去非の著『嶺外代答』（淳熙八年1181）に「石湖賞評“桂山之奇、宜爲天下第一”、……觀前人品題桂林之意、端不誣矣」といい、その「序」（淳熙五年1178序）に「晩得范石湖『桂海虞衡志』、又於藥裏得所鈔名數、因次序之、凡二百九十四條」というように、范成大の『桂海虞衡志』に倣ったものである。また、後に明・王士性が作った『桂海志續』は『桂海虞衡志』の続編であった。この他、岳和声の『後驂鸞録』（万暦三十九年1611）もその序にいうように范成大『驂鸞録』にならったものである。桂林に関するものではないが、清・檀萃の著『滇海虞衡志』も范成大『桂海虞衡志』に倣っている。文豪・范成大の『桂海虞衡志』は桂林の史料として重要な位置を占めていた。今日に伝わるもので桂林の歴史・文化・山水・文学等を知るには明・張鳴鳳の『桂勝』・『桂故』が最も詳細な記録であるが、『桂勝』は各条において晩唐・莫休符『桂林風土記』と范成大『桂海虞衡志』の関係記載を引いた上で当時の状況を紹介している。清・閔叙『粤述』でも「范成大稱“桂山之奇……爲天下第一”」と『桂海虞衡志』「志巖洞」の言を引いた後で「今録其尤著者」として独秀山・疊綵山等の山峯岩洞二十二個所を紹介しており、「志巖洞」の続編・補編ともいえる。

このような原因と背景によって明清には「桂林山水甲天下」の出自あるいは

典拠を范成大の言に求める者が多かった。しかし原因はこれだけではない。范成大の説は当時にあって極めて重要な主張であり、それが支持されたものと思われる。

Ⅲ　范成大の評論とその思想

范成大『桂海虞衡志』（乾道九年1173）の言「桂山之奇、宜爲天下第一」は成語「桂林山水甲天下」と類似しているが、「天下第一」という評価は彼自身の体験と思想による結論であり、当時にあっては画期的なものであった。先に示したように范成大の前にあって、孫覿「桂林十詠」（紹興二年1132）に「桂林山水奇麗、妙絶天下」、李綱「道陽朔」詩（建炎三年1129）に「山水尤奇絶、舊傳爲天下第一」といい、いっぽう張洵「蒙亭唱和」詩（靖康元年1126）に「桂林山水冠衡湘」、張孝祥「千山觀記」（乾道二年1166）に「桂林山水之勝甲東南」という。范成大は張洵・張孝祥らの説に異を唱えるものであるが、しかし孫覿・李綱らと同じ立場から桂林山水を再評価したのではない。范成大の説はこのいずれとも異なる、新しい論評であり、主張であった。

「天下第一」の論証

范成大『桂海虞衡志』の「志岩洞」の序論に次のようにいう。

> 余嘗評桂山之奇、宜爲天下第一。士大夫落南者少、往往不知、而聞者亦不能言。余生東呉、而北撫幽・薊、南宅交・廣、西使岷・峨之下、三方皆走萬里、所至無不登覧、太行・常山・衡嶽・廬阜、皆崇高雄厚、雖有諸峰之名、政爾魁然、大山峰雲者、蓋強名之。其最號奇秀、莫如池之九華・歙之黄山・括之仙都・温之雁放蕩・夔之巫峽、此天下同稱之者、然皆數峰而止耳。又在荒絶僻遠之瀕、非几杖間可得。且所以能拔乎其萃者、必因重岡複嶺之勢、盤桓而起、其發也有自來。桂之千峰、皆旁無延縁、悉自平地崛特立、玉笋瑶、森列無際、其怪且多如此、誠當爲天下第一。韓退之詩云“水作青羅帯、山如碧玉簪”、柳子厚「訾家洲記」云“桂州多靈山、發地峭竪、林立四野”。黄魯直詩云“桂嶺環城如雁蕩、平地蒼玉忽嵯峨”。

范成大の説は極めて具体的にして一定の客観性を有している。かれは多くの地方にある著名な山水を形状・数量等の特徴の上から比較して桂林の山水を天下第一と評しているが、その根拠は東は今の蘇州、北は北京、西は四川、南はベトナム北部まで行って、換言すれば万里を巡った結果、文字通り“天下”の山水を知っている、という自己の経験にある。具体性・客観性・経験主義、これ

らが説得力のあるものにしている。范成大以前で一定の紙幅をもって桂林の山水を論説した文人はいないわけではない。しかし范成大ほど詳細に分析・論証し、かつその上で天下第一なることを明言した者はいなかった。たとえば范成大よりも百年以上も前の嘉祐四年（1059）頃に桂林を通った張師正の『倦遊雑録』「陽朔石峯」に次のようにいう。

桂州左右、山皆平地拔起數百丈、竹木蓊鬱、石如黛染、陽朔尤奇（一作佳）、四面峯巒皆駢立、故沈水部郴嘗題詩曰：“陶潛彭澤五株柳、潘岳河陽一縣花。兩處爭如陽朔好、碧蓮峯裏住人家”。

また、胡仔は范成大よりも約四十年も早く桂林を訪れており、その著『苕溪漁隱叢話』前集55に張師正『倦遊雑録』の記載を引いた上で次のようにいう。

余初未之信也。比歲（紹興六年1136）[13]、兩次侍親赴官桂林、目覩峯巒奇怪、方知『倦游雜録』所言不誣、因誦韓・柳詩云：“水作青羅帶、山爲［如］碧玉簪”、又云：“海上［畔］群峯［尖山］似劒鋩、春［秋］來處處割愁腸”之句、眞能紀其實也。山谷老人謫宜山、道過桂林、亦嘗有詩云：“桂嶺環城如雁蕩、平地蒼玉忽嵯峨。李成不生郭熙死、奈此百嶂千峰何”。

范成大も根拠の先例として北宋の黄庭堅や唐の柳宗元・韓愈など先賢の詩文を引用し、自説を補強しているが、范成大は別に胡仔のこの文を知っていて真似たのではない。胡仔と范成大が引く柳宗元の作品は異なっており、范成大は引用は「〔桂州裴中丞作〕訾家洲〔亭〕記」であるが、いっぽう胡仔の引用するものは「與浩初上人同看山寄京華親故」詩である。柳宗元に「浩初上人見貽絶句欲登仙人山因以酬之」詩があり、“仙人山”は柳州にあるから、「與浩初上人同看山寄京華親故」詩は柳州での作である[14]。当時、この詩は桂林を詠んだものと考えられていたらしい。建炎三年(1129)に海南島の瓊州に流謫された李綱(1083－1140）の「送李泰發吏部赴官陽朔」詩に「山作劒鋩攢峻拔、水如羅帶巧廻還」というのも柳宗元「與浩初上人同看山寄京華親故」詩をふまえたものであり、陽朔の山水についていう。范成大はこれを引かず、「訾家洲記」の方に注目する。胡仔と范成大が韓愈・柳宗元を引くのは北宋における韓愈・柳宗元ら古文作家の評価とも関係があり、桂林の山水に言及した大詩人としては、南宋・羅大経「游南中巖洞記」にも「桂林石山怪偉、東南所無。韓退之謂“山如碧玉簪”、柳

---

(13) 自序に「紹興丙辰（六年)、余侍親赴官嶺右、道過湘中」という。

(14) 陳永源・奉少廷編注『名人筆下的桂林』（新華出版社2001年）はこの詩を収めて「任柳州刺史期間来桂林時所作」（p14）というが、正しくない。

子厚謂“拔地峭起、林立四野”、黄魯直謂“平地蒼玉忽嶒峨”」というように、韓愈・柳宗元・黄庭堅の三人が当時最も有名であった。

ここで注目したいのは張師正や胡仔の論説との違いである。いずれも自己の体験に立った言説ではあるが、范成大は「余生東呉、而北撫幽・薊、南宅交・廣、西使岷・峨之下、三方皆走萬里、所至無不登覧」という実際に「天下」を歩いた自己の体験に立って具体的にそれらの景勝との違いを指摘し、優劣を下した上で「第一」の結論を示している。范成大の経験主義的審美観は張師正や胡仔とは異なる。その新しさは柳宗元の文に学んで得たものではなかろうか。柳宗元「游黄溪記」の冒頭に次のような印象的な表現が見える。

> 北之晉、西適豳、東極呉、南至楚・越之交。其間名山水而州者以百數、永最善。

山水で有名な地は多いが永州が最も善いとする評価に先だって柳宗元は自己の経験した地理的範囲を指定している。ただ表現の上から見れば、柳宗元の文は簡潔であるのに対して范成大の文は具体的にして説明的である。また、范成大の引く柳宗元「〔桂州裴中丞作〕訾家洲〔亭〕記」に次のようにいう。

> 大凡以觀游名於代（世）者、不過視於一方、其或傍達左右、則以爲特異。至若不騖遠、不陵危、環山・洄江、四出如一、夸奇競秀、咸不相讓、遍行天下者、唯是得之。桂州多靈山、發地峭竪、林立四野。署之左（東）曰灕水、水之中曰訾氏之洲。凡嶠南（嶺南）之山川、達於海上、於是畢出、而古今莫能知。……凡名觀游於天下者、有不屈伏退讓以推高是亭者乎。……蓋非桂山之靈、不足以瑰觀。……非公之鑒、不能以獨得。

范成大の「桂之千峰、皆旁無延縁、悉自平地崛特立」という表現は柳文「桂州多靈山、發地峭竪、林立四野」を敷衍したものである。また、「士大夫落南者少、往往不知、而聞者亦不能言」、さらに他の有名な山水について「雖有諸峰之名、政爾魁然、大山峰雲者、蓋強名之」・「其最號奇秀……皆數峰而止耳」・「在荒絶僻遠之瀕、非几杖間可得」という規模・環境・位置などにおける欠点・不足の指摘と「所以能拔乎其萃者、必因重岡複嶺之勢、盤桓而起、其發也有自來」という山水地理的環境全体に対する評価、これらの分析と評論にも柳宗元のいう天下に有名な山水の議論との共通点が認められる。つまり范成大の論は柳宗元の説について具体的な例を挙げて説明したものであるといえよう。范成大の論は柳宗元「訾家洲亭記」冒頭の議論を意識したものではなかろうか。その他、范成大が「桂山之奇、宜爲天下第一」という「桂山」は、桂林の特定の一山を

指したものではなく、桂林の諸山峰の総称であり、これも恐らく柳宗元の「桂州多靈山」「蓋非桂山之靈、不足以瑰觀」に拠ったものであろう。早くは桂林の龍隠岩に刻された周刊「釋迦寺碑」（元符二年1099）に「桂林西郊多靈山」というが、これも柳文が典拠になっている。また、「天下第一」に通じる表現は柳宗元「上裴行立中丞作撰『訾家洲亭記』啓」に「今是亭之勝、甲於天下、而猥顧鄙陋、使爲之記」と見える。両者の審美眼と表現には相通じる所がある。先に見た例と同じように、范成大『桂海虞衡志』の「志岩洞」の序論は古文大家柳宗元の山水記を敷衍したもの、注疏であるともいえる。ただし、このような傾向の原因は柳宗元・范成大の個性のみに帰すべきではなく、唐人の古文と宋人の古文の間の差、唐・宋の変化にも求められるものである。

このように、自己の経験に立って言を尽くして桂林の山水が「天下第一」であることを証明したのは范成大が最初であった。それ以後、桂林の評価は大きく変わっている。先に挙げた南宋人は戴復古・李曽伯・王正功など、多くが范成大の「天下第一」の見方を継承するようになる。ただ常演「桂林巖記」（淳熙丁酉1177）の「桂林巖竇甲西南山水之勝。……張・范二公自帥移鎮相繼游觀、大書蒼崖」は張孝祥・范成大に言及するが、「桂林巖竇甲西南山水之勝」が張孝祥「千山觀記」の言「桂林山水之勝甲東南」の影響下にあるのは、范成大が『桂海虞衡志』を書いたのは「序」によれば桂林を離れて四川に向かう道中の淳熙二年（1175）夏であるから、その説を知らなかったことが考えられる。

「天下第一」の政治思想

范成大が「余嘗評桂山之奇、宜爲天下第一。士大夫落南者少、往往不知、而聞者亦不能言」というのは経験主義による評価ではあるが、じつは彼自身の政治思想に基づくものでもあった。当時、桂林山水の評価は「冠」「甲」であるとはいえ、その比較範囲は南方に限定されていた。張洵「蒙亭唱和」詩（靖康元年1126）に「桂林山水冠衡湘」、張孝祥「千山觀記」（乾道二年1166）に「桂林山水之勝甲東南」、常演「桂林巖記」（淳熙丁酉1177）に「桂林巖竇甲西南山水之勝」、張釜「水月洞題名」（紹熙五年1194）に「桂林山水之勝冠絶西南」、羅大経「游南中巖洞記」（紹定間（1228-1233）頃）に「桂林石山怪偉、東南所無」という。彼ら南宋初期の人の評価では範囲が南方に限定されている。それはかれらがいずれも北方の地を踏んだことがなかったからである。これに対して范成大は範囲を「天下」にまで広げる。それは「北撫幽・薊」という北方を含んだことによる。このような発言を可能にしたのは范成大が金朝との交渉のために使節とし

て北の地を訪れた経験があったからである。范成大が桂林を訪れたのは金に北を奪われてから約五十年も後のことである。当時の情勢から見るならば、范成大の表現は単なる地理的範囲の指定ではなく、北半分を今なお宋朝の国土であると認め、祖国を回復せんという政治的な信念・願望が託されている。「北撫幽・薊」とした上で「天下」というのは政治的な発言でもあった。

更に想像を逞しくしていえば、范成大（1125-1193、字は石湖居士）の「天下第一」の再評価は張孝祥（1132-1169、号は于湖居士）の「甲東南」の言を最も意識したものかも知れない。張孝祥と范成大は同じく高官にして当時の代表的な文豪でもあり、相前後して静江知府兼広南西路経略安撫使に左遷されたが、桂林での言動には衝突が見られる。張孝祥は桂林の伏波山に遊んでは玩珠洞を還珠洞に改名し、宜山（漓山、今の象鼻山）[15]に遊んでは水月洞を朝陽洞に改名したが、范成大はこれを厳しく非難している。象鼻山水月洞に刻されている張孝祥の題名に「丙戌（乾道二年1166）上巳、余與張仲欽（維）・朱元順來遊水月洞。……仲欽欣然舉酒屬余曰：茲亭由我而發、盍以名之。余與仲欽頃同官建康、蓋嘗名其亭曰“朝陽”、而爲之詩、非獨以承晨曦之光、惟仲欽之學業足以鳳鳴于天朝也。今亭適東向、敢獻亭之名亦以朝陽、而巖曰朝陽之巖、洞曰朝陽之洞」という。その数年後の乾道九年、桂林に着任した范成大は「復水月洞銘并序」を作って張孝祥による改名を「以一時燕私、更其號“朝陽”、邦人弗從」「百世之後、尚無改也」と厳しく非難する。この非難は文物の改名に対してなされたものではあるが、新名が適当であるか否かを問題とするものではない。「以一時燕私」という言は范成大の基本的な政治思想を示すものであり、張孝祥に対する為政者としての非難に他ならない。両者が中央で政治的に衝突したことは史書では確認できないが、対金政策の上ではやや立場が異なっている。『宋史』389「張孝祥傳」によれば「金再犯邊（隆興二年1164冬）、（張）孝祥陳金之勢不過欲要盟。宣諭使劾孝祥、落職罷。復集賢殿修撰・知靜江府・廣南西路經略安撫使。……渡江初（南宋初期）、大議惟和戰、張浚主復讐、湯思退祖秦檜之説力主和。孝祥出二人之門而兩持其説、議者惜之」というから、対金政策では張孝祥は日和見的であった。いっぽう『宋史』386「范成大傳」には范成大が使者として金と交渉した時のエピソードを載せて、「隆興再講和、失定受書之禮、上嘗悔之。遷（范）成大起居郎、假資政殿學士、充金祈請國信使。國書專求陵寢、蓋泛使

[15] 戸崎哲彦「桂林名山“象鼻山”与“漓山”」（『桂林旅游高等専科学校学報』2002-1）を参照。

也。上面諭受書事、成大乞併載書中、不從。……至燕山、密草奏、具言受書式、懷之入。初進國書、詞氣慷慨、金君臣方傾聽、成大忽奏曰“兩朝既爲叔姪、而受書禮未稱、臣有疏”。搢笏出之。金主大駭、曰“此豈獻書處耶”。左右以笏標起之、成大屹不動、必欲書達。既而歸館所、金主遣伴使宣旨取奏。成大之未起也、金庭紛然、太子欲殺成大、越王止之、竟得全節而歸」という。このエピソードは対金政策をめぐる范成大の立場をよく示している。かれは高宗とその重臣であった秦檜の和議路線を継承する孝宗と張孝祥らの軟弱を嫌って、毅然として服従しない態度をとっている。このような対金政策に見られる二人の態度の違いは二人の政治思想そのものの違いに他ならない。剛直な范成大にとって日和見的な張孝祥の態度は鼻持ちならなかったはずであり、「以一時燕私」「百世之後、尚無改也」は公私を混同した貴族的趣味の為政者に対する批判であった。このように張孝祥と范成大の間には軋轢があり、范成大が桂林に着任以前、桂林で最も影響の大であったのは張孝祥である。そうならば、張孝祥の「桂林山水之勝甲東南」と范成大の「桂山之奇、宜爲天下第一」も両者の衝突の現れと理解することができる。「甲東南」というのは、金に割譲を余儀なくされた南宋の版図を容認した言である。いっぽう「天下第一」というのは、范成大自身の「幽・薊」の北方まで行ったという経験と自負、また金に侵略された華北地域は依然として宋朝の版図であるという信念に基づく。すでに桂林には「甲東南」という大官の発言があったにもかかわらず、「天下第一」と言ったのには政治的意味があり、それは張孝祥らの政治的な意識の改革を迫るものであったといえよう。

このように、南宋初期における桂林山水の位置づけの揺れの中で、戴復古「玉華洞」詩の「憶昨遊桂林、巖洞甲天下」、王正功「使府經略提刑大中丞公宴賀之詩」の「桂林山水甲天下」、李曽伯「重建湘南樓記」の「桂林山川甲天下、三百家年間無兵革之警」など、「甲天下」が採られるようになる。これはただ范成大の表現を換言しただけでなく、その愛国思想を継承するものでもあった。

Ⅳ　王正功の詩句と柳宗元の説

南宋にあっては桂林山水の評価は范成大が論評するに至って一変し、北方を含めた、文字通り「天下第一」の地位に再評価されるようになった。王正功の詩句「桂林山水甲天下」はそれを継承するものであるが、しかし必ずしも范成大の言を直接の根拠にして作られたものではないかも知れない。「桂林山水甲天

下」という評価、さらに表現に至っても、柳宗元に拠る所が最も大きい。

(1) 柳宗元は桂林について「桂州裴中丞作訾家洲亭記」に「至若不騖遠、不陵危、環山・洄江、四出如一、夸奇競秀、咸不相讓、遍行天下者、唯是得之」といい、また「上裴行立中丞作撰訾家洲亭記啓」に「今是亭之勝、甲於天下、而猥顧鄙陋、使爲之記」という。この点は従来の説ですでに指摘されている所である。柳宗元のこのような評価と表現を七言の詩句にすれば「桂林山水甲天下」となろう。

そもそも「山水甲天下」というような表現は、桂林に限らず、すでに一般的なものであった。唐代において、地方にあった官僚・文人はその地の景勝を尋ね、それが天下に稀であることを得意げに吹聴していた。たとえば孟郊「越中山水」詩に「日覺耳芽勝、我來山水州」、韓愈「燕喜亭記」に「吾州（今の広東省連州市）之山水名天下」、劉禹錫「海陽湖別浩初師并引」に「呉郡以山水冠於天下」、また劉禹錫「含輝洞（今の湖南省道県にある）記」に「營陽鬱鬱、山水第一」、裴通「金庭觀（浙江省天台山）晉右軍書樓墨池記」に「越中山水奇麗者、剡爲之最；剡中山水奇麗者、金庭洞天爲之最」、白居易「草堂記」に「匡廬奇秀甲天下、山北峰曰香爐峰、北寺曰遺愛寺。介於峰寺之間、其境勝絶、又甲廬山」、また白居易「冷泉亭記」に「東南山水、餘杭郡爲最、就郡而言、靈隱寺爲尤。由寺觀而言、冷泉亭爲甲」という。柳宗元が桂林について「甲於天下」というのも、山水の「最」「甲」「第一」を求めて競っている当時の風潮から出たものである。それまで自己の体験から永州黄渓の山水が天下第一であると見なしていた柳宗元は、元和十年、さらに遠方の柳州に行くことによって桂林の美なることを知り、そこで先のような評価を下した。韓愈・劉禹錫・白居易等はいずれも自分の左遷された地の山水が天下に甲であるというが、かれらはいずれも桂林に来たことはなかった。それは「凡嶠南（嶺南）之山川、達於海上、於是畢出」という辺境にあったために「古今莫能知」であった。そこで桂林山水と「甲於天下」を結びつけた最初の文豪詩人は柳宗元であったといえる。

(2) 范成大よりも前に柳宗元の「訾家洲亭記」を桂林山水天下第一としたものという理解があった。孫覿「桂林十詠」（紹興二年1132）の序に次のようにいう。

> 桂林山水奇麗、妙絶天下、柳子厚記訾家洲亭、粗見其略。余以六月六日度桂嶺、更僕詣象、……名之曰“桂林十詠”。

ここにいう“桂林山水奇麗、妙絶天下”とは“桂林山水甲天下”の意に他なら

ない。孫覿はこれを柳宗元の「訾家洲亭記」に紹介されているという。「桂林山水奇麗、妙絶天下」という語句そのものは柳「記」には見えないが、柳「記」は確かにそのような印象を読者に与えるものであった。少なくとも文人孫覿はそのように理解していた。また、李綱は「道陽朔、山水尤奇絶、舊傳爲天下第一、非虚語也。賦二絶句」（建炎三年1129）という。「舊傳」といっているように、李綱自身の評価ではなく、すでに当時そのような評価が一般的に行われていたわけであるが、同じく桂林陽朔県での李綱「送李泰發吏部赴官陽朔」詩に「山作劒鋩攢峻拔、水如羅帯巧廻還」という叙景詩句は「山水尤奇絶」を伝えるものとして「舊傳爲天下第一」の根拠を示すものである。前一句は柳宗元「與浩初上人同看山寄京華親故」詩の「海畔尖山似劒鋩、秋來處處割愁腸」に拠って作られたものであり、胡仔『苕溪漁隱叢話』（紹興十八年1148）前集55でも同じ柳詩が引かれている。さらに、胡仔が引く張師正『倦遊雜録』（元豊元年1078以前）の「桂州左右、山皆平地拔起數百丈……四面峯巒皆駢立」という表現は柳「記」の「桂州多靈山、發地峭竪、林立四野」が意識されているであろう。

当時、柳宗元の詩文はかなり広く知られていた。先に指摘したように范成大『桂海虞衡志』の「志岩洞序」には柳宗元の「訾家洲亭記」・「游黄溪記」等の影響が認められる。また、李師中「蒙亭記」（嘉佑七年1062）に「桂林、天下之勝處、茲山水又稱其尤、而在城一隅、荒穢不治、若無人知者、數千百年間、豈天秘地藏、不以示人」というが、これにも柳宗元の影響がある。桂林山水が天下の優であることは柳宗元の「訾家洲亭記」・「上裴行立中丞撰訾家洲亭記啓」によって知られるが、「而在城一隅」以下にいう景勝発見の楽しみ及び優なる者が埋もれていることを山水に託して表現する方法、さらにその語彙等に至っても、「永州八記」および「永州崔中丞萬石亭記」・「零陵三亭記」等、柳宗元の代表的な山水游記に見られる。李師中は恐らく柳文を読んでそれに学んだのであろう。周知の如く、北宋に至って韓愈・柳宗元の古文は模範とされ、特に柳宗元については、「永州八記」などと総称されるように、その山水游記が最も高く評価された[16]。

(3) そこで王正功の詩を振り返って見れば、詩句には「桂林山水甲天下、玉碧羅青意可參」とある。これは柳・韓の詩文を踏まえたものである。後一句が韓愈「送桂州嚴大夫」の詩句「水［一作江］作青羅帯、山如碧玉簪」に基づい

---

(16) 拙著『柳宗元永州山水游記考』（中文出版社、1996年）を参照。

て作られていることは明らかである。同題の詩は白居易・張籍も作っているが、韓愈の詩が最も有名であった。韓詩を用いたものは、王正功以前において、先に挙げた范成大『桂海虞衡志』以外にも、陶弼「桂林」詩（慶暦四年1044）に「青羅江水碧蓮山、城在山光水色間」、米芾「詩送端臣桂林先生兼簡信叔老兄師坐」（建中靖国元年1101）に「驂鸞碧玉林、琢句白瓊瑶。人間埃壒盡、青羅數分毫」、李彦弼「湘南樓記」（崇寧元年1102）に「愼昌黎之高篇兮、江山羅帯而玉簪。繫銜命而來遊兮、若仙登而鸞驂」、尚用之「蒙亭唱和詩」（靖康元年1126）に「翠岫俯映青羅光、上有喬木摩穹蒼」、張孝祥「水調歌頭・桂林集句」に「青羅帯、碧玉簪、……莫問驂鸞事」、范成大「懐桂林所思亭」詩に「簪山奇絶送歸時、曾榜新亭號所思」、趙夔「桂林二十四岩洞歌」（紹興甲戌1154）に「山琢玉簪攢萬疊、江分羅帯繞千尋」、任續「賦玩玉岩」（紹興甲戌）に「艮維矗孤峰、玉簪倚天杪」、張栻「九日登千山觀」詩（淳熙五年1178）に「地形盤薄一都會、山色周遭萬玉簪」、佚名氏「穿山」詩「下瞰青羅江、古木鬱蕭森」、朱晞顔「還玉洞題詩」（紹熙五年1194）に「江波蕩漾青羅帯、岩石虚明碧玉環」というように、実に多い。また、宋代には雉山の下に“青羅閣”が築かれ、七星山栖霞洞の前には“簪帯亭”が築かれた(17)。范成大の『驂鸞録』も韓愈の同詩にいう「遠勝登仙去、飛鸞不暇驂」に出るものである。

このように王正功詩の第二句が韓愈が桂林を詠んだ有名な作品に基づくものであれば、第一句「桂林山水甲天下」が柳宗元に拠るものであることは、類似の語彙・表現だけでなく、聯の構成法から見ても十分に考えられる。中国では前代の詩人文人の名句を使って詩文を作ることが多いが、宋人は唐人の作品、特に韓愈・柳宗元の作品を典故にすることが多い。たとえば、陶弼「桂林」詩に「青羅江水碧蓮山、城在山光水色間。莫道宜人唯桂郡、驂鸞客至只思還」というのは、先の韓愈の詩と杜甫「寄楊五桂州潭」詩の「五嶺皆炎熱、宜人獨桂林」を踏まえたものである。また、蘇軾「白鶴峰新居欲成、夜過西郊翟秀才二首」其一に「繫閟豈無羅帯水、割愁還有劒鋩山」は、韓愈の「送桂州嚴大夫」詩と柳宗元「與浩初上人同看山寄京華親故」詩の「海畔尖山似劒鋩、秋來處處割愁腸」に拠る。李綱「送李泰發吏部赴官陽朔」詩の「山作劒鋩攢峻拔、水如羅帯巧廻還」も蘇軾の詩と同じく柳詩と韓詩を踏まえたものである。楼鑰「頃遊龍井得一聯」の「水眞緑淨不可唾、魚若空行無所依」は、前句は韓愈「題合

(17) 孫覿「雉山寺青羅閣」詩、劉克荘「簪帯亭」詩による。

江亭寄刺史鄒君」詩の「紅亭枕湘江、蒸水會其左。瞰臨眇空闊、緑淨不可唾」を、後句は柳宗元「至小丘西小石潭記」の「潭中魚可百家許頭、皆若空游無所依」を、ほぼそのまま使っている。このように唐人の詩句・名句は宋人が詩文を作る上で使われる典故となっており、とりわけ北宋中期以後は、韓愈・柳宗元の評価が高まると同時にしばしば典故として用いられ、さらに韓・柳の作品で対句を作ることが工夫された。范成大が「桂之千峰、皆旁無延縁、悉自平地崛特立、玉笋瑶、森列無際」というのも柳宗元「訾家洲亭記」と韓愈「送桂州嚴大夫」詩をふまえた表現である。そこで王正功の「桂林山水甲天下、玉碧羅青意可參」も、桂林についての有名な唐人の作品、柳宗元の記と韓愈の詩を典拠にしてそれを七言の形に整えたものであると考えることが可能である。

おわりに

以上、考察したところをまとめれば、“桂林山水甲天下”という成句は、南宋・王正功の詩に見えるが、これと同一の評価はすでに南宋初の范成大の名作『桂海虞衡志』に見られ、王正功詩の石刻が鍾乳石に覆われて知られなくなってからは、文豪范成大に起源が求められるようになった。しかし桂林山水を天下第一とする評価と表現は范成大よりも前、北宋の孫覿・李綱らの詩に示されており、その評価は孫覿・李綱らには柳宗元に始まると理解されていた。また、宋人は前代の唐人の名作を典拠として句を作ることが多く、王正功詩の「桂林山水甲天下」が柳宗元の散文表現を七言の詩句にしたものであることは、次句の「玉碧羅青意可參」が韓愈の詩を踏まえたものであることからも理解される。

ところで、韓愈が桂林の山水を讃えた「水作青羅帯、山如碧玉簪」等の詩句は有名であるが、韓愈の表現は想像によるものであり、その形成には友人柳宗元の作品が影響しているかも知れない。韓愈の名句は張籍・白居易らとともに厳謨が桂林に赴任するのを送った「送桂州嚴大夫」詩に見え、後に范成大『驂鸞録』は「桂林自唐以來、山川以奇秀稱、韓文公（愈）雖不到、在潮（州）熟聞之」という。韓愈が潮州に左遷されるのは元和十四年（819）のことであり、また潮州は広東省の東南に位置している。したがって「在潮熟聞之」であったとは断言できない。柳宗元の「訾家洲亭記」等は元和十二年の作であるから、韓愈は潮州に左遷される以前にすでに柳宗元の作品によって桂林の山水美を知っていたはずである。韓愈の桂林山水賛美の詩は、張籍・白居易の同題詩とは違って、韓愈独自の豊かな詩的イメージを膨らませ、詩才を駆使した見事な表現

ではあるが、そのイメージの形成には柳宗元の作品が寄与しているのではなかろうか。韓詩の「水作青羅帯、山如碧玉簪。……遠勝登仙去、飛鸞不暇驂」という林立する山とその間を繞る江、このような山水空間に対する仙境のイメージには、柳宗元「訾家洲亭記」の「環山洄江、四出如一、誇奇競秀、咸不相讓……發地峭竪、林立四野……飄浮上騰、以臨雲氣、萬山面内、重江束隘、聯嵐含輝……顥氣廻合、邃然萬變、若與安期・羨門接於物外」というイメージと重なる所がある。大きな差といえば、韓愈の作品が巧みに比喩を用いてきらびやかであるのに対して柳宗元のそれは叙景が説明的である点にあるが、これは詩歌と散文という形式の相違に起因するところが大きい。つまり、柳宗元が散文で記述したものを韓愈は詩で表現したのである。さらに韓詩には「山如碧玉簪」と「遠勝登仙去」の間に「戸多輸翠羽、家自種黄柑」の対句があるが、柳宗元が柳州刺史時代に民のために柑橘を植えてたことは有名であり、柳詩「柳州城西北隅種甘樹」に「手種黄甘二百株、春來新葉遍城隅」といい、韓愈が柳宗元の鎮魂廟のために書いた「柳州羅池廟碑」には「樹以名木、柳民既皆悦喜」といって治績を頌えている。桂林で民が柑樹を植えるようになったのが柳宗元の行政にならったものなのか、柳宗元が桂林の産業にならったものなのか未詳であるが、「家自種黄柑」は柳宗元のそれを想起させる。また、「柳州羅池廟碑」の「辭」にいう「荔子丹兮蕉黄」は柳詩「紅蕉」を[18]、「鵝之山兮柳之水」は柳詩「登柳州峨［鵝］山」を、「稌充羨兮蛇蛟結蟠」は「寄韋珩」詩の「陰森野葛交蔽日、懸蛇結虺如蒲萄」という詠む人に強烈なイメージを与える句を踏まえたものであり、韓愈はこれら柳宗元の作品をよく読んでいて、それをふまえて「碑」を書いている。韓愈「送桂州嚴大夫」詩が柳宗元の作品からヒントを得ていることは、内容・時間的関係から見て十分に考えられることである。

(2002.10.30)

（本稿は科学研究費補助金「中国嶺南地域の摩崖石刻の資料化とそれに拠る中国山水文学の実証的研究」による研究成果の一部である）

---

[18] 張孝祥「水調歌頭・桂林集句」は桂林に関する先人の名句を集めて詞を作ったものであり、それに「江山好、青羅帯、碧玉簪、……家植黄柑丹荔、戸拾明珠翠羽、蕭鼓夜沈沈。莫問驂鸞事、有酒且頻斟」というのは韓詩「送桂州嚴大夫」の句を編んだものである。「家植黄柑丹荔」の「丹荔」は韓詩には見えないが、韓愈「柳州羅池廟碑」の「荔子丹兮蕉黄」を踏まえたものである。